

# 福岡女学院大学の日本語教員養成コース —その歩みと現在—

守 山 恵 子

## はじめに

福岡女学院大学日本語教員養成コースは、1990年、大学開学と同時に人文学部日本文化学科と英米文化学科にそれぞれ置かれ、1993年度（1990年入学、1994年3月卒業）に第一期の修了生を送り出した。それ以来、2016年度（2017年3月）までに1072名の修了生を輩出している。修了生には本学独自の修了証を発行し、資格の認定をしている<sup>註</sup>。1072名の修了生のうち、日本語教育に携わっている卒業生の数は正確にはわからない。しかし、国内外で日本語教師として活躍している卒業生は決して少なくない。国内では、本学近隣の日本語学校で活躍をしている1期生をはじめ、各地の日本語学校や大学で日本語を教えている卒業生がいる。海外では、中国、韓国、台湾、インドネシア、タイ、オーストラリアなどで日本語教師として働いている卒業生がいる。中には、海外で日本語学校を経営し、日本に短期滞在したい学習者の日本での日本語学習を、日本にいる同級生と連携してコーディネートしている卒業生もいる。さらには、コースで学んだことが日本語教育と直接には関連しない職場でも役に立っていると聞くことがある。

海外にも会員を持つ日本語教育学会は本学の日本語教員養成コース開設から30年ほど前の1962年に設立されている。日本語教員養成教育の指針が示されたのは1985年（昭和60年）になってからで、文部省の日本語教育施策

の推進に関する調査研究会報告「日本語教員の養成等について」の中で「標準的教育内容」が示され、さらに、日本語教員検定制度に関する調査研究会から1987年（昭和62年）に「日本語教員検定制度について」が出された。当時、この二つが日本語教員養成のためのカリキュラムの指針となった。その後、1991年に大学日本語教員養成課程研究協議会（通称：大養協）が発足した。2000年には文化庁から「日本語教員養成において必要とされる教育内容」が発表され、これが前述の「標準的教育内容」と「日本語教員検定制度について」に代わり、現在まで、日本語教員養成コースのカリキュラムの指針となっている。

2017年12月には文化審議会国語分科会日本語教育小委員会から「日本語教育人材の養成・研修のあり方について」（報告案）が出され、2018年1月現在パブリックコメントを募集中である。大学における日本語教員養成のあり方にも、新たな枠組みや内容が提案されており、2019年度あるいは2020年度からは、本学でも新たなカリキュラムの整備が必要になると考えられる。

本稿では、これらのことを念頭に、本学の日本語教員養成の歩みを振り返り、現状を報告し、さらに、今後の課題を明らかにしたい。

## 1. 日本語教員養成コース・第1期

日本語教員養成コースの第1期を、2000年度入学生（2003年度修了）までの時期とする。この間のカリキュラムは、前述したとおり、1985年（昭和60年）に文部省の日本語教育施策の推進に関する調査研究会報告「日本語教員の養成等について」で示された「標準的教育内容」と日本語教員検定制度に関する調査研究会が1987年（昭和62年）に示した「日本語教員検定制度について」にもとづいている。1987年（昭和62年）は、日本語教育能力検定試験の第1回が行われた年でもあり、日本語教員養成が広く認知され始めた時期だとも考えられよう。本学の日本語教員養成コースでは、2000年度までに2回のカリキュラムの改訂が行われた。提供科目およびコース修了に必要とされた科

福岡女学院大学の日本語教員養成コース—その歩みと現在— (守山)

目および単位数は表1のとおりである。当初は学科ごとに日本語教員養成コースをおくという考え方であったため、履修単位が学科によって違う。1990年度から1993年度カリキュラムでは、日本文化学科は必修36単位、選択4単位の計40単位、英米文化学科は必修23単位、選択16単位の計39単位であった。1994年度から1999年度カリキュラムでは、日本文化学科の必修単位が減り、選択単位が増え、両学科とも計40単位を履修することになった。2000年度カリキュラムでは、必修単位が22単位となり、選択単位18単位の計40単位の履修がコース修了に必要とされた。

表1 1990年～2000年入学生までのカリキュラム一覧

標準的教育内容	本学の授業科目	配当年次	1990～	1994～	2000
日本語の構造に関する科目	日本語学概論	2年	<b>必修 4</b>	<b>必修 4</b>	
	日本語学概論 I	2年			<b>必修 2</b>
	日本語学概論 II	2年			<b>必修 2</b>
	日本語構造論	2年	<b>必修 4</b>	選択 4	
	日本語構造論特論	2年		選択 4	
	日本語学演習	4年		選択 2	
	日本語構造論 A (音声)	2年			選択 2
	日本語構造論 B (音声)	2年			選択 2
	日本語構造論 C (文法)	2年			選択 2
	日本語構造論 D (文法)	2年			選択 2
	日本語構造論 E (語彙・意味)	2年			選択 2
	日本語構造論 F (語彙・意味)	2年			選択 2
	日本語学演習 I	3年			選択 1
日本語学演習 II	3年			選択 1	
日本人の言語生活等に関する科目	日本語史	2年	<b>必修 4</b>	<b>必修 4</b>	
	日本語史 I	2年			<b>必修 2</b>
	日本語史 II	2年			<b>必修 2</b>
	日本語表現法	1年	<b>必修 2</b>	<b>必修 2</b>	
	日本語表現法 A (文章表現)	1年			<b>必修 1</b>
	日本語表現法 B (音声表現)	1年			<b>必修 1</b>
日本事情	日本文学史概論	1年	<b>必修 (N)4</b> 選択 (A)4	選択 4	
	日本文学史概論 I	1年			選択 2
	日本文学史概論 II	1年			選択 2
	日本思想史	2年	<b>必修 (N)4</b> 選択 (A)4	選択 4	
	日本文化史	3年	<b>必修 (N)4</b> 選択 (A)4	選択 4	
	日本文化史 I	3年			選択 2
	日本文化史 II	3年			選択 2
	文化交流史 A (アジアと日本)	1年			選択 2
	文化交流史 B (アジアと日本)	1年			選択 2
	文化交流史 C (欧米と日本)	2年			選択 2
	文化交流史 D (欧米と日本)	2年			選択 2
	日本史概論	1年	<b>必修 (N)4</b> 選択 (A)4	選択 4	

言語学的 知識能力	日本史概論Ⅰ	1年			選択 2
	日本史概論Ⅱ	1年			選択 2
	言語学概論	2年	選択 4	選択 4	
	言語学概論 A	2年			選択 2
	言語学概論 B	2年			選択 2
	対照言語学	3年	選択 4	選択 4	
	対照言語学 A	3年			選択 2
	対照言語学 B	3年			選択 2
	社会言語学	3年	選択 4	選択 4	
	社会言語学 A	3年			選択 2
社会言語学 B	3・4年			選択 2	
日本語の 教授に 関する科 目	日本語演習	4年	<b>必修 2</b>		
	日本語教育法	3年	<b>必修 4</b>		
	日本語教育法Ⅰ	3→2年		<b>必修 4</b>	<b>必修 2</b>
	日本語教育法Ⅱ	3→2年		<b>必修 2</b>	<b>必修 2</b>
	日本語教育法Ⅲ	4→3年			<b>必修 2</b>
	日本語教育法Ⅳ	3年			<b>必修 2</b>
	日本語教授法演習	4年	<b>必修 4</b>	<b>必修 4</b>	
	日本語教授法演習Ⅰ	4年			<b>必修 2</b>
日本語教授法演習Ⅱ	4年			<b>必修 2</b>	
外国語・ 外国事情 関係	異文化間コミュニケーション A (アジアと日本)	3年			選択 2
	異文化間コミュニケーション B (欧米と日本)	3年			選択 2
	英語圏の文化 A	3年			選択 2
	英語圏の文化 B	3年			選択 2
	海外言語・文化研修	1年			選択 2
	合計単位数		52	58	78
	必修単位数		36 (N) 24 (A)	20 (N) 20 (A)	22
	<b>資格取得に必要な単位数</b>		<b>40 (N) 38 (A)</b>	<b>40 (N) 40 (A)</b>	<b>40</b>

N は日本文化学科、A は英米文化学科を、数字は単位数を示す。

## 1-1. カリキュラムについて

第1期のカリキュラムは、「日本語、日本、言語、日本語教育」がキーワードで、日本語教育での教授内容に特化したものになっており、学習者の心理や文化背景、異文化接触、第二言語習得などのような学習者を理解する視点とはほとんど盛り込まれていない。それは、指針とした「標準的教育内容」の考え方による。

最初の4年は、コース履修のための科目のほとんどが必修で、選択科目が少なかった。その後、履修に必要な単位数は変わらないものの、徐々に必修科目が減り、選択科目が増えている。2000年カリキュラムでは、必修科目が日本語学概論Ⅰ、日本語学概論Ⅱ、日本語史Ⅰ、日本語史Ⅱ、日本語表現法

A（文章表現）、日本語表現法B（音声表現）、日本語教育法Ⅰ、日本語教育法Ⅱ、日本語教育法Ⅲ、日本語教育法Ⅳ、日本語教授法演習Ⅰ、日本語教授法演習Ⅱの12科目、22単位である。

## 1-2. 修了生について

第1期とした2000年度入学生までは、その後の大学における日本語教員養成のカリキュラムの指針となる「日本語教員養成に置いて必要とされる教育内容」を文化庁が発表するまでであると同時に、本学では、人文学部が日本文化学科と英米文化学科を改組し、現代文化学科と表現学科が誕生し、大学のキャンパスも移転し、学院のすべての校種を現在の福岡市南区日佐に統合するまでである。

1993年度修了生から2003年度修了生までは、表2の通り、合計で589名である。この間の最終年である2003年度修了生の数は、入学者減の影響もあったのだろうと考えられ、極端に少ない。2002年度修了生までは、1995年度修了生が32名であるが、毎年40名以上が日本語教員養成コースを修了している。とくに1998年度は85名もの修了生がおり、この前後、日本文化学科

表2 1993年度～2003年度修了生数

修了年度	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
日本文化学科	27	45	27	33	53	59	51	54	44	27	9
英米文化学科	15	17	5	15	10	25	18	10	14	18	8
科目等履修生	0	0	0	0	0	1	1	0	1	1	1
小計	42	62	32	48	63	85	70	64	59	46	18
延べ人数	42	104	136	184	247	332	402	466	525	571	589

の学生のほぼ半数がコースを履修し、修了している。また、人数は少ないものの、このころから、科目等履修生でコースを修了している者もいる。

現在、本学の日本語教員養成コース修了生が、ミッション日本語教育研究会を立ち上げ活動を続けているが、20名ほどのメンバーの半数以上が1998年度前後の修了生である。この会に参加している一期生で、卒業後から現在まで日本語教師を続けている卒業生は、「日本語教師を目指して女学院に進んだ」と語っており、日本語教員養成コースの存在が、入学の動機にもなっていたことがわかる。

## 2. 日本語教員養成コース・第2期

第2期を2001年度から2012年度までとする。前述したように、2000年に文化庁から「日本語教員養成において必要とされる教育内容」が発表され、この後現在に至るまで、本学の日本語教員養成コースはその内容に従っている。第2期の日本語教員養成コースの科目および単位数は表3のとおりである。

表3 2001年～2012年入学生までのカリキュラム

区分	本学の授業科目	配当年次	2001～	2005～	2007～	2009～
社会文化地域	・世界と日本異文化接触・日本語の歴史と現状	交流文化史	1年	選択2		
	交流文化論	1年		選択2	選択2	選択2
	文化人類学	1年	選択2	選択2	選択2	
	地域文化論	1年	選択2	選択2	選択2	
	ヨーロッパの文化	3年		選択2	選択2	
	アメリカの文化	3年		選択2	選択2	
	東アジアの文化	2年		選択2	選択2	
	国際社会と民族	1年				選択2
	比較文化論	3年				選択2
	日本とヨーロッパ	2年	選択2			
	日本とアメリカ	3年	選択2			
	日本と東アジア	3年	選択2			
	比較文化A（日本と東アジア）	2年				選択2
	比較文化B（日本とヨーロッパ）	2年				選択2
	比較文化C（日本とアメリカ）	2年				選択2
日本文学の発生・・・（注2）	1年	選択2				
日本文学の変遷・・・（注2）	1年	選択2				

福岡女学院大学の日本語教員養成コース—その歩みと現在— (守山)

言語と社会	・言語の使文化ニヨ ・社会係言と異ミ ・用・コケ ン	言語学概論	1年	選択2	選択2	選択2	選択2
		対象言語学	2年	選択2	選択2	選択2	選択2
		社会言語学	2年	選択2	選択2	選択2	選択2
		日本語コミュニケーション技法Ⅰ	1年	選択2	選択2	選択2	
		日本語コミュニケーション技法Ⅱ	1年	選択2	選択2	選択2	
		異文化コミュニケーション	1年	選択2	選択2	選択2	選択2
		社会学入門	1年				選択2
		日本語表現技法A(文章)	2年				選択2
		英語表現技法B(ディベート)Ⅰ	3年				選択2
		言葉とコミュニケーション	1年				
		メディアとことば	2年				
		言語と心理	・言語過程習達化と ・言・得・異文解 ・得・異理 の心	コミュニケーションと対人行動	1年	選択2	
人間形成と教育	1年			選択2	選択2	選択2	選択2
教育心理学	2年			選択2	選択2	選択2	選択2
第二言語習得理論	2年			選択4	選択2	選択2	
第二言語習得理論Ⅰ	2年						選択2
第二言語習得理論Ⅱ	2年						選択2
キッズコミュニケーション	3年			選択2	選択2	選択2	
児童英語教育法	2年			選択2	選択2	選択2	
異文化へのアプローチ	1年			選択2			
異文化へのアプローチ(アジア)	1年				選択2	選択2	選択2
異文化へのアプローチ(欧米)	1年				選択2	選択2	選択2
児童日本語教育法							選択2
言語と教育	・言法・教実 ・育習・文育 ・異教育ミ ・間・コケ ・ニ育 ・言と ・育と	日本語教育概論Ⅰ	2年	必修2	必修2	必修2	必修2
		日本語教育概論Ⅱ	2年	必修2	必修2	必修2	必修2
		日本語教材研究Ⅰ	3年	必修2	必修2	必修2	必修2
		日本語教材研究Ⅱ	3年	必修2	必修2	必修2	必修2
		日本語教授法演習Ⅰ	4年	必修2	必修2	必修2	必修2
		日本語教授法演習Ⅱ	4年	必修2	必修2	必修2	必修2
		フィールドワーク・・(注1)	1年	選択2			
		フィールドワーク表現D	1年		選択2	選択2	
		日本語教育実習フィールドワーク	2年				選択2
言語	・言語の般語研 ・構・目造語 ・の構・言 ・究・コケ ・ニ育	日本語学概論Ⅰ	2年	必修2	必修2	必修2	必修2
		日本語学概論Ⅱ	2年	必修2	必修2	必修2	必修2
		日本語の構造	2年	選択2	選択2	選択2	選択2
		日本語の音声	2年	選択2			
		日本語表現技法B(音声)	2年		選択2	選択2	選択2
		日本語の語彙・意味	2.3年	選択2	選択2	選択2	選択2
		中国のことばと文化Ⅰ	1年	選択2			
		韓国語のことばと文化Ⅰ	1年	選択2			
		中国語Ⅰ	1年		選択2	選択2	
		韓国語Ⅰ	1年		選択2	選択2	
		英語表現技法B(スピーチ)	2・3年	選択2			
		英語表現技法B(ディベート)Ⅰ	3年		選択2	選択2	
		日本語史Ⅰ	2年				選択2
		日本語史Ⅱ	2年				選択2
		合計単位数		74	68	68	68
必修単位数		16	16	16	16		
<b>資格取得に必要な単位数</b>		<b>34</b>	<b>34</b>	<b>34</b>	<b>34</b>		

(注1) 日本語教育実習の「フィールドワーク」に限る。

(注2) 2001年度入学の学生のみ適用する。

数字は単位数を示す。

「日本語教員養成において必要とされる教育内容」は、「社会・文化・地域に関わる領域」「教育に関わる領域」「言語に関する領域」の3領域をバランスよく履修することを求めており、それまでの「日本語、日本、言語、日本語教育」から、国際的な視点、社会学的な視点、心理学的な視点、教育学的な視点などが、選択科目としてではあるが、含まれるようになった。このことは、日本語教員としての資質に何が求められるかを広い視野で考える必要を示しており、重要な変更であったと考えられる。

コース修了に必要な単位数は、第1期と比べると減り、34単位である。必修科目は8科目、16単位となり、選択科目数が増えている。これは、人文学部が現代文化学科と表現学科の2学科体制から、2003年に英語学科を加えた3学科体制になり、どの学科の学生も希望する場合はコース履修がしやすいように、コースの選択科目に各学科の専門教育科目を含めるようにしたためでもある。

## 2-1. カリキュラムについて

コース修了に必要な必修科目は、2001年カリキュラムが現在も踏襲されている。日本語学概論Ⅰ、日本語学概論Ⅱ、日本語教育概論Ⅰ、日本語教育概論Ⅱ、日本語教材研究Ⅰ、日本語教材研究Ⅱ、日本語教授法演習Ⅰ、日本語教授法演習Ⅱの8科目、16単位である。それまでは、日本語教育法Ⅰ～Ⅳとしていた科目を、日本語教育概論Ⅰ～Ⅱ、日本語教材研究Ⅰ～Ⅱとすることにより、内容をわかりやすくした。また、履修年次については、概論を原則として2年、教材研究を3年、教授法演習を4年とすることにより、必修科目の学習の流れが明確になった。たとえば、動詞の分類について概論で学び、教材研究で日本語教育では具体的にどのように扱うかを知り、教授法演習でさらにどのように教えるかを考え、体験するという流れである。日本語教員養成コース全体の3年間の学習がスパイラル学習になるよう設計されているといえる。

選択科目は、「日本語教員養成において必要とされる教育内容」に合わせ、



(1)「社会、文化、地域」に当たる科目として、交流文化論、比較文化論といった科目や国際社会に関わる科目などを置いた。(2)「言語と社会」の区分に当たる科目として、言語学や社会学、またコミュニケーションに関わる科目を置いた。(3)「言語と心理」の区分に当たる科目として、教育心理学や第二言語習得理論等を置いた。ここで、特筆すべき科目は、2009年カリキュラムから導入した児童日本語教育法である。児童生徒に特化した日本語教育を日本語教員養成コースに取り入れている大学は少ないが、前述した「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告案)」の日本語教育人材を考えるうえで重要な三つの分野(「生活者としての外国人」「留学生」「児童生徒等」)の1つでもあり、今後、重要性は増すことこそあれ、減ることはないと考えられる。(4)「言語と教育」の区分に当たる科目は、ほぼ必修科目である。唯一、国内または海外の日本語教育機関でのフィールドワーク(実習)を選択科目としている。これは、参加に費用がかかることから、必修とはしていない。(5)「言語」の区分に当たる科目は、必修の日本語学概論に加え、日本語についての科目を置いている。

2006年入学生からは、以下の通り、日本語教員養成コース履修資格基準を設け、原則としてその基準を満たした場合に、コース履修を認めることとした。

日本語教員養成コース履修資格基準

次の基準を原則として満たした者が第3年次よりコースを履修することができる。

- ・前年度までに60単位以上を修得し、GPA(累積)が2.2以上であること
- ・第1年次・第2年次における必修科目を修得していること
- ・2年次において、「日本語教育概論Ⅰ」「日本語教育概論Ⅱ」を修得していること

※ただし、編入生および交換留学・認定留学の対象学生はこの限りではない。

これにより、日本語教育概論Ⅰ、日本語教育概論Ⅱおよび日本語学概論Ⅰ、日本語学概論Ⅱはコース必修科目ではあるものの、すべての学生に開かれた科目であるのに対し、日本語教材研究Ⅰ、日本語教材研究Ⅱ、日本語教授法演習Ⅰ、日本語教授法演習Ⅱはコース履修を認められた学生のみが履修でき

る科目となった。これらの変更は、積極的なコース選択を学生に求め、学生の意識を高めるのに効果があったと考えられる。

## 2-2. 修了生について

2004年度から2015年度の修了生数は表4のとおりである。2003年入学者（2006年度修了）からは英語学科が加わり、2008年度には合計で51名が終了している。2006年度入学者（2009年度修了）からは、履修資格基準を設けたことと、2011年入学者（2014年度修了）からは、英語学科の方針により、学生のコース履修が認められなくなったことから修了者が減少している。

2003年には大学院人文科学研究科が開設され、比較文化専攻でも日本語教員養成コースを履修、修了している者がいる。また、科目等履修での修了生もわずかずつではあるが続いている。

2011年度からは、ほぼ毎年、協定校である台湾の樹人醫護管理専科學校應用日語科に日本語助手として1年勤務する修了生を送り出している。

表4 2004年度～2015年度修了生数

修了年度	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
日本文化学科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
英米文化学科	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
現代文化学科	15	17	27	18	24	23	14	16	13	18	18	22
表現学科	28	19	19	18	11	18	15	9	7	8	10	2
英語学科	0	0	9	3	14	0	10	7	1	5	0	0
大学院	3	1	2	0	1	1	1	1	1	0	0	1
科目等履修生	1	1	3	0	1	0	1	0	1	0	0	0
小計	48	38	60	39	51	42	41	33	23	31	28	26
延べ人数	637	675	735	774	825	867	908	941	964	995	1023	1048

### 3. 現在の日本語教員養成コース

#### 3-1. コース概観

2013年カリキュラムの授業科目は表5のとおりである。2013年に表現学科が改組され、言語芸術学科とメディア・コミュニケーション学科の二つの学科が開設されたことと現代文化学科の科目の見直しにより、日本語教員養成コースの選択科目を変更する必要が生じた。

表5 2013年度カリキュラム

区分		本学の授業科目	配当年次	2013
社会文化地域	・世界と日本文化の歴史 ・異文化の歴史 ・日本語の現状	文化人類学	1年	選択 2
		国際社会と民族	1年	選択 2
		比較文化 A (日本と東アジア)	2年	選択 2
		比較文化 B (日本とヨーロッパ)	2年	選択 2
		比較文化 C (日本とアメリカ)	2年	選択 2
		日本文化論 D (外国から見た日本)	2年	選択 2
		演劇芸能研究 J	3年	選択 2
		ポップカルチャー J	2年	選択 2
言語と社会	・言語と社会の関係 ・言語と異文化 ・コミュニケーション	対象言語学	2年	選択 2
		社会言語学	2年	選択 2
		異文化コミュニケーション	1年	選択 2
		社会学入門	1年	選択 2
		日本語表現技法 A (文章)	2年	選択 2
		日本語表現技法 B (音声)	2年	選択 2
		ことばとコミュニケーション	1年	選択 2
		メディアとことば	2年	選択 2
言語と心理	・言語理解の過程 ・言語習得の心理 ・異文化理解の心理	人間形成と教育	1年	選択 2
		教育心理学	2年	選択 2
		第二言語習得理論 I	2年	選択 2
		第二言語習得理論 II	2年	選択 2
		児童日本語教育法	2年	選択 2
		日本語教育概論 I	2年	<b>必修 2</b>
言語と教育	・言語教育の実際 ・異文化コミュニケーション ・言語教育の実際 ・言語教育の実際	日本語教育概論 II	2年	<b>必修 2</b>
		日本語教材研究 I	3年	<b>必修 2</b>
		日本語教材研究 II	3年	<b>必修 2</b>
		日本語教授法演習 I	4年	<b>必修 2</b>
		日本語教授法演習 II	4年	<b>必修 2</b>
		日本語教育実習 フィールドワーク	2年	選択 2
言語	・言語の構造 ・日本語の構造 ・言語研究 ・コミュニケーション	言語学概論	1年	選択 2
		日本語学概論 I	2年	<b>必修 2</b>
		日本語学概論 II	2年	<b>必修 2</b>
		日本語の構造	2年	選択 2
		日本語の語彙・意味	2年	選択 2
		日本語史	2年	選択 2

	合計単位数	68
	必修単位数	16
	<b>資格取得に必要な単位数</b>	<b>34</b>

数字は単位数を示す。

言語芸術学科とメディア・コミュニケーション学科の双方の学科の学生が履修しやすいように、専門教育科目を選択科目に加えた。必修科目は、2001年カリキュラムから変更はない。ただし、2016年度入学生からは、法務省入国管理局が平成28年7月22日に策定した「日本語教育機関の告示基準」に基づき、4年次の必修科目である日本語教授法演習に1単位の日本語教育実習を含むこととしている。

2016年度の修了者数は24名であった。

修了年度	2016
現代文化学科	<b>14</b>
言語芸術学科	<b>7</b>
メディア・コミュニケーション学科	<b>1</b>
大学院	<b>1</b>
科目履修生	<b>1</b>
小計	<b>24</b>
延べ人数	<b>1072</b>

### 3-2. 日本語教育に特化した授業科目について

以下では、日本語教員養成コースの必修および選択科目のうち、日本語教育に特化した、日本語教育概論、日本語教材研究、日本語教授法演習、児童日本語教育法、日本語教育実習フィールドワークの各授業の現在の内容と方法について、詳述する。なお、各授業で使用している主なテキストについては一覧にした（資料2）。

#### 3-2-1. 日本語教育概論

原則として2年次に履修する日本語教育概論は、本学の学生であれば誰で

も履修できる科目となっている。人文学部の学生にとっては、コース履修を考えるのであれば、この科目を履修しなければならないが、履修したからといってコース履修をしなければならないわけではなく、またコース履修が保証されるわけでもない。日本語教員養成コース履修を考える「お試し」科目といえるかもしれない。また、人間関係学部と国際キャリア学部の学生にとっては、この科目を履修してもコース履修はできないが、日本語教育能力検定試験受験の助けやきっかけになったり、ボランティアをするための準備になったりということがある。

2017年度の日本語教育概論Ⅱの履修者55名のうち、コース履修を始めているが編入や留学などでそれまでに履修ができなかったため履修している上位学年生、上位学年でコース履修はしていないが興味があって履修している者、他学部の者、聴講生が合計で約2割、13名いる。それ以外の学生は、今後コース履修を申請する可能性がある2年生である。ほとんどは日本語を母語とする学生だが、数名それ以外の学生も含まれる。

日本語教育概論では、『新・はじめての日本語教育1』『新・はじめての日本語教育2』をテキストとして使用している。多くの日本語母語話者の学生にとっては、あまりにも当たり前で考えたことがない日本語を見直し、客観的な視点を身につけることが日本語教育には必要である。学生が授業前にある程度の知識を持ち、母語話者の強みを生かして考えながら授業に参加するように、授業の前に事前にテキストを読んで考えてくると、例を考えたり、例文を作成したりすることを求めている。授業のはじめに毎回行う小テストで、前回学んだことに関連することがらとこれから授業で扱うことがらに関する小テスト（テキストやノートの参照可）を毎回15分程度かけて実施している（資料1）。事前にテキストを読んでこななければならない状況を作り出すためである。テキストを読んできていなくても、その場でテキストを繰ることもできるが、読んでいないとどこに何が書いてあるかがわからず、時間が不足することになるので、学生は多少なりともテキストを読んで（見て）来ているようである。また、その場で読んで考えて答えたとしても、そのこ

ともその日の授業に参加するために役に立つ。この小テストについて、次の授業で解説を行って内容の定着を図っているが、教員にとっては、小テストの採点を通して、毎回学生の理解不足や誤解に気づくことができるというメリットも大きい。また、すべての小テストを後述する課題と共に学期末に返却し、振り返りを行っている。これにより、学期全体の授業の流れを学生自身が再確認することができる。小テストでの誤りを自ら訂正できない場合には、テキストを再読したり、教員に質問したりすることを勧め、どの学生も一定程度の理解に到達することを目指している。

前期にも後期にも複数の課題が課されている。前期の課題1では、意味の近いオノマトペのペアを1組選び、辞書で調べたり、例文やスキットを作成したりという指示に従ってレポートを完成させる。課題2、課題3、課題4は、テキストの指示された範囲で、与えられた枠組みに従って、テスト問題と解答を作成する。テスト問題と解答の作成は、どのように問えばいいか、何を問えばいいか、選択肢を用意する場合にはどのような選択肢が適当か、どのように答えことができるか、配点はどうするかなど、を考えながらテキストや授業のノートを何度も繰ることになり、復習に相当だと考えられる。

後期も、課題1はテスト問題と解答の作成である。課題2では、終助詞「ね」と「よ」が使われている例文を、LINEやメールなどから探し、それを材料に、文法書なども参照しながら、与えられた枠組みに従ってレポートをまとめる。常日頃の日本語の使用を客観的に見つめなおすきっかけにしたいと考えており、取り出した「ね」と「よ」が使われている文によっては偏ったまとめになる場合もあるが、その場合も、偏ったことをマイナスには評価せず、教員からの助言の対象と考えている。課題3では、前期に扱ったオノマトペと「ね」「よ」を日本語学習者が学ぶためのダイアログを作成する。「会話文を作る」のは簡単だと思って取りかかる学生が多いようだが、ことのほか苦戦したり、試行錯誤したりすることがレポートからわかる。課題には枠組みが与えられているが、それでも、テーマ選び、ことばづかい、あいづち、など、細かなことまで検討しなければならないことに気づき、時間をかけて

課題に取り組んでいるようである。

日本語教育概論では、社会人講師として、現役の日本語学校の先生にお話しただく機会を設けていることも記しておきたい。普段の授業で教員が言っても印象に残らないことも、日本語学校の先生のお話は印象深く聞くようで、コメントや質問がたくさん出される。日本語学校での交流会にも誘いがあり、毎年数名の学生が参加している。参加した学生からは、また行きたいという感想を聞いたり、授業とぶつかって参加できなかった学生からは、またこんな機会があればぜひ参加したいという声も聞こえたり、日本語学校との連携が日本語教員養成には重要であると改めて感じている。

### 3-2-2. 日本語教材研究

3年次履修が原則の日本語教材研究では、さまざまな教科書を概観してから、『みんなの日本語』を1年かけて分析することが主である。たとえば、日本語教育概論で「て形」を扱っていても、なぜ動詞の活用による分類が必要なのかがよくわかっていない学生も多いが、教材研究によって、動詞の活用による分類を扱う理由が明確になる。

教材研究でも、日本語教育概論同様、毎回小テストを行っている。前回学んだ文型、表現を使った例文を作成する問題が中心の復習を目的とする小テスト（テキスト・ノート参照可）である。日本語教育概論のように、その日に扱うことがらについて問うことはしていない。以下が小テストの問題例である。

以下の文を完成させてください。43課「～てきます」を学んだ学習者のためです。

- (1) \_\_\_\_\_てきますから、ちょっと待っていてください。
- (2) すみませんが、\_\_\_\_\_てきてくれませんか。
- (3) あっ、材料が足りません。\_\_\_\_\_てきてください。
- (4) ちょっと、\_\_\_\_\_てきてもいいですか。

担当教員にとっては、学生の理解度を知らうえで重要な材料になっており、理解が不十分だと考えられる場合は、翌週の小テストについての解説時に不足を補い、定着を図っている。

前期の課題は二つある。課題1では『みんなの日本語』以外の教科書を1冊選び、与えられた項目に従って『みんなの日本語』と比較してレポートを作成する。教科書の選択は、授業中に60冊ほどの教科書の中から選択をする時間を設けて行っている。課題2では、『みんなの日本語』第1課から18課までの中から1課を選び、対象学習者を考え、課の構成に従って作り直す。作り直しを通して、教科書の構成に対する理解が進み、語彙の選択に配慮ができるようになり、普段使っていることばを見直すことになり、当該課の学習のポイントが明確になる。事前に授業で、教員が作成した例を示し、作成の手順についても説明をするが、既習の文型と未習の文型の区別がつかなかったり、学習者を考えた例文にならなかったり、問題の指示を例で示さず文にしたり、配慮不足の場合が多い。しかし、それでも、学生は試行錯誤を経て、テキスト、学習項目、学習者などに対する理解を深めることができる。

後期の課題も二つあり、課題1では、学習者が「あいうえお」を学ぶための教材（例えば表、カード、ゲーム）を作成する。対象学習者や「あいうえお」の何を学ぶためのものか、どのように学ぶことができるのかなどを各自が考えて作成する。作成したものは、お互いに見せ合い、説明しあい、質問しあう時間を設けている。課題2では、『みんなの日本語』第51課として、使役受け身の課を作成している。一つの課を作り直すことを通して、『みんなの日本語』の構成などを学んだ前期の課題を思い出し、まったく新たな課を作ることを通して、さらに、教材作成についての理解を深め、その教材をどう使うかを考えることができる。

2017年度は、これらに加えて、本学が開講したサマー短期日本語研修コースに参加した韓国大学生のサポートと授業見学、授業参加を行った。全員が初級レベルの授業を見学し、初級学習者との接点を持つことができる貴重な機会となった。また、本学の卒業生に話をしてもらう機会も設けた。日本



語パートナーズに参加し、帰国後日本語学校で教師をしている卒業生の話は、年齢も近く、具体的で、印象深かったようである。この話をきっかけに、日本語パートナーズに応募することを決意した学生もいる。

### 3-2-3. 日本語教授法演習

日本語教員養成コースの仕上げの科目である日本語教授法演習では、『みんなの日本語』の模擬授業、『NEJ』の理解とマスタートキスト作成、本学の上級レベルの日本語授業参加、サマー短期日本語研修コースの初級レベルの授業への参加などを行った。本学の留学生を対象とする日本語の授業で、グループでのディスカッションに加わったり、学習者とペアで日本語学習を支援したりしたことにより、たとえば、上級の学習者であっても日本語母語話者にとっては思いがけないこと（たとえば複合動詞や身近な語彙）がわからないことがあることを知ることができた。また、初級学習者にはどのように説明すればわかってもらえるかを体験することもできた。

模擬授業で学生が最も苦勞しているのは、文型の導入部分である。導入とは何かがわからない、導入すべきポイントがわからない、どう導入すればよいかかわからない、自分が考えたことが導入になっているかどうかかわからないといったことから、前期の模擬授業では、文型の導入なしに練習を始めたり、対象学習者には理解できないであろう日本語で説明をしたり、準備してきた補助教材を使いこなせなかったりということが多々ある。一方、留学生は、自らの日本語学校での経験を活かすことができ、導入の何かがよくわかっている場合が多い。

学生が導入を理解できるよう、毎年、教員がモデルを見せているが、それに加え、2017年度は、留学生にベトナム語の初級の授業をしてもらった。多くの学生は、英語を学び始めた時も日本語の助けがあり、大学での中国語や韓国語の授業でも日本語が使われているため、母語以外の言語をその言語だけで学んだ経験をほとんど持っておらず、留学生によるベトナム語のみの授業は新鮮で、導入理解にもつながった。ベトナム語の授業後の後期模擬授業

では、導入に改善が見られた。

『みんなの日本語』を十分に理解し、使えるようになることが日本語教員養成コースの仕上げには大切であると考えているが、同時に、構造シラバス以外の教科書にも触れる機会も作りたいと考え、『NEJ』を取り入れている。この教科書は、サマー短期日本語研修コースのテキストでもあったため、ある程度テキストを理解しておくことが授業参加にも必要だと考えた。模擬授業では、学生は担当課に合わせて、マスターテキストを作成している。日本語学習者にとっての手本となる、「自分について語るダイアログ」の作成である。

今後、日本語教員養成コースでは、教育実習を取り入れることが求められており、どのような学習者に対する実習ができるか、どこでどれくらいの授業を担当できるか、日本語教授法演習の授業改善とともに考える必要がある。

### 3-2-4. 児童日本語教育法

児童日本語教育法は、2年生以上が対象の科目であり、2010年に初めて開講された。2015年までの6年間は、筆者が担当したが、2016年からは、福岡市日本語サポートセンターのコーディネーターであり、現場経験が豊富な講師が担当している。本授業は、日本で生活をする外国にルーツを持つ児童生徒を対象とした日本語教育に重点を置いている。日本語教員養成コースの科目ではあるが、全学に開かれており、特に教職を目指す学生の履修が望まれる。児童日本語教育法を学んで、子どもたちの置かれている状況や背景をある程度理解することは、学生サポーターとして福岡市や春日市で活動をする際の助けにもなっている。前述したように、児童生徒等への日本語は、「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告案）」の日本語教育人材を考えるうえで重要な三つの分野（「生活者としての外国人」「留学生」「児童生徒等」）の1つでもあり、今後、重要性が増すと考えられる。

児童日本語教育法の詳細については、稿を改めたい。

### 3-2-5. 日本語教育実習フィールドワーク

日本語教育実習フィールドワークは、2017年度現在、9月に協定校である韓国インジェ大学で、3月にやはり協定校である台湾樹人醫護管理專科學校で行われている。国内での実習は、現在は、授業としては行っていない。

韓国インジェ大学の实習に参加できるのは、日本語教員養成コースの4年生のみとなっており、最大人数は6名である。これまで希望者が6名を超えたことはなく、選考を行ったことはない。インジェ大学の日本語科の学生を対象に、本学の学生2名が一組になり、初級レベルの文型の導入と練習を50分で行うのがこれまでの方法である。事前に担当する文型が知らされ、7月～8月に教員指導の下に本学で準備を行うが、インジェ大学での授業見学期間にも、準備した授業内容を改善し授業を行う。

樹人醫護管理專科學校應用日語科での実習参加は、原則として2年生3年生である。上位学年が優先されるが、これまで2年生での参加も多い。このプログラムも最大人数は原則として6名である。参加者が2年生の場合は、樹人で使われている『みんなの日本語』の練習部分を担当したり、1対1での会話練習の相手になったり、授業中のサポートをしたりする。3年生の場合は、『みんなの日本語』ⅠまたはⅡの50分の授業を担当する。樹人での実習の場合も、事前に本学で教員の指導のもと、準備を重ねる。

日本語教育実習に参加した学生はその後、日本語教師になる割合が高い。日本語教員養成コース修了生で日本語教師になった学生のほとんどが、日本語教育実習フィールドワーク参加者である。参加していない学生で日本語教師になった学生も、海外での日本語学習者との何らかの出会いの経験を持っており、教育実習が意識づけに大きな役割を果たしていると思われる。

2016年度は、国際交流基金「海外日本語教育インターン派遣プログラム」に採択され、参加学生たちは本学からの補助に加えて、費用の補助を受けることができた。2017年度は、参加学生の人数がごく少ないことが予想されたため、申請を見送った。2018年度はプログラムに変更があり、韓国のプログラムでは申請できなくなったが、台湾のプログラムでの申請を行っている。

## おわりに

本学の日本語教員養成コースは、「日本語教育人材の養成・研修の在り方について」が出されるのを待つまでもなく、さまざまな日本語学習者を支える日本語教師を送り出すべく、改善を重ねる必要があるだろう。これまで、どんな日本語教師を送り出してきたのか、どんな日本語教師を送り出し続けることができるのか、ミッション日本語教育研究会などで出会う卒業生からのフィードバックを大切に改善に活かしていきたい。また、本稿執筆中に福岡市内の日本語学校からインターンシップの案内が届き、日本語学校が日本語教師養成中から関わり、よりよい教師を育てたいと考えていることも伝わってきた。これまでも、卒業後すぐに日本語教師になることを考えている学生を預かり指導してくださる日本語学校があり、助けられてきた。今後さらに、日本語学校との連携を深め、現場の声に耳を傾け、授業改善、コース改善に取り組みたいと考えている。

## 注

法務省入国管理局が平成28年7月22日に策定した「日本語教育機関の告示基準」第一条十三項に「全ての教員が、次のいずれかに該当するものであること。イ 大学（短期大学を除く。以下この号において同じ。）又は大学院において日本語教育に関する教育課程を履修して所定の単位を修得し、かつ、当該大学を卒業し又は当該大学院の課程を修了した者 ロ 大学又は大学院において日本語教育に関する科目の単位を26単位以上修得し、かつ、当該大学を卒業し又は当該大学院の課程を修了した者 ハ 公益財団法人日本国際教育支援協会が実施する日本語教育能力検定試験に合格した者 ニ 学士の学位を有し、かつ、日本語教育に関する研修であって適当と認められるものを420単位時間以上受講し、これを修了した者 ホ その他イからニまでに掲げる者と同等以上の能力があると認められるもの」とあり、本学の日本語教員養成コースを修了した者は、日本語教育機関の教員としての資格を有する。

**資料1：日本語教育概論の小テスト例**

第三回 小テスト (教科書にある例は使用不可) + 予習を確認するテスト

氏名：	学籍番号：
<p>1. 次の語の最初の子音の調音方法はなにか，書きなさい。</p> <p>(1) 川：_____ 音_____                      (2) 道：_____ 音_____</p> <p>(3) りんご：_____ 音_____                      (4) たんす：_____ 音_____</p> <p>2. 促音を含む語で，促音の後が「か行」「さ行」「た行」のものを書きなさい。外来語は除く。</p> <p>(1) _____ (か行)                      (2) _____ (さ行)                      (3) _____ (た行)</p> <p>3. 以下の説明で，正しいものに○，違うものに×をつけなさい。</p> <p>① ( ) 日本語の母音「う」は唇を丸くして前に突き出して発音する。</p> <p>② ( ) 特殊拍は，1拍と数える。</p> <p>③ ( ) 日本語のリズムは，5拍と7拍を基本としている。</p> <p>④ ( ) 高母音は，口の開きが小さい。</p> <p>⑤ ( ) 日本語の母音「え」と「お」の作り方は，「関与する舌の部分」だけが違う。</p> <p>⑥ ( ) 息が発音器官のどこかで邪魔されるか邪魔されないかが，子音と母音の違いだ。</p> <p>⑦ ( ) 日本語で言い分け，聞き分けている母音の数は，英語より多い。</p> <p>⑧ ( ) 日本語には，母音単独の語はあるが，子音単独の語はない。</p> <p>⑨ ( ) 発音に上下の歯が関与することがある。</p> <p>⑩ ( ) ある単語の音素的音節の数はモーラの音節の数と同じかそれより多い。</p> <p>4. あ段，い段，う段の長音を含む語を書きなさい。</p> <p>(1) あ段                                      (2) い段                                      (3) う段</p> <p>5. 「福岡」「女学院」と別々の場合と，「福岡女学院」とまとまった場合で，違うことはどれか。以下の中から一つ選び○で囲みなさい。</p> <p>イントネーション，強弱アクセント，高低アクセント，発音，無声化</p> <p>6. 撥音の練習のために，「ん」の部分の発音が違う例を考え，書きなさい。「ん」は語中に置くこと。</p> <p>(1) _____ (2) _____ (3) _____</p> <p>7. 次の花の名前で，平板型アクセントの語には○をそれ以外には×を書きなさい。</p> <p>さくら ( )                      つばき ( )                      もくれん ( )                      さざんか ( )</p>	

資料2：2017年度使用の主なテキスト一覧

科目名	テキスト名	出版年	出版社
日本語教育概論Ⅰ	新・はじめての日本語教育 1 増補改訂版	2016	アスク
日本語教育概論Ⅱ	新・はじめての日本語教育 2 増補改訂版	2016	
日本語教材研究Ⅰ	みんなの日本語初級Ⅰ 第2版	2012	スリーエーネット ワーク
日本語教材研究Ⅱ	みんなの日本語初級Ⅱ 第2版	2013	
日本語教授法演習	初級日本語文法と教え方のポイント	2008	
	みんなの日本語初級Ⅰ 第2版	2012	
	みんなの日本語初級Ⅱ 第2版	2013	
	NEJ テーマで学ぶ基礎日本語 Vol.1	2012	くろしお出版
児童日本語教育法	小学校 JSL カリキュラム「解説」	2005	スリーエーネット ワーク